



Title	認識動詞構文の構造と格
Author(s)	阿部, 忍
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1991, 25, p. 17-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56511
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

認識動詞構文の構造と格¹⁾

阿 部 忍

0. 研究の対象と目的

本稿で中心的に扱うのは、次のような文の構造である。

- (1) a. 太郎が 花子を 天才だ と 思っている
- b. 太郎が 花子を 美しく 思った

このような構文を益岡(1987)では認識動詞構文と呼んでいる。これらの構文を取る動詞(思う, 考える, 信じる, 感じる, みる, みなす, 判断する, etc.)が「認識動詞」として特徴付けられるからである。本稿では, 専ら(1 a)のタイプだけを, GB理論の枠組みを用いて分析することにする。²⁾

まず, 上の構文の諸要素についての名称を決めておかなければならない。(1)の例文の「花子」のようにヲ格を持つ名詞句を「ヲ格名詞句」と呼んでおく。「天才だ と」のように補文標識の「ト」を伴って現れる節をト節と呼ぼう。これは益岡の「引用語」に相当する。

さて本稿の目的であるが, まず第1に上の構文の正しい構造を解明することにある。なぜなら, 次の1で触れるように, 現在異なる複数の説が存在するからである。次に第2の目的は, 上のような構文を扱うことにより, 日本語の格理論を発展させることにある。即ち, どのようなシステムによって文中の名詞句に格が与えられているのかを明らかにする目標がある。

本稿では, まず1で従来の研究の流れと本稿の位置付けについて簡単に

述べる。次に、2で本稿と対立する分析の批判を展開する。さらに3では上の構文の正しい構造及び関連する諸問題を扱う。4では上の構文に類似した構文、即ち次のようにヲ格名詞句が「ノコト」を取る構文及び格助詞脱落の問題を扱う。

(2) 太郎が 花子ノコトを 天才だ と 思っている

1. 研究の流れと本稿の位置付け

まず、Kuno (1976) の研究について触れる必要がある。Kuno (1976) では、(3 a) から (3 b) が主語繰り上げ (Subject Raising) によって派生されるとしている。

(3) a. 太郎が [花子が 馬鹿だ] と 思っている

b. 太郎が 花子_iを [t_i 馬鹿だ] と 思っている

即ち、(3 b) は補文の主語が主文の目的語に繰り上げられて派生したものだと考えられている。

ところが、生成文法の最近の枠組みの中ではこのような変形は許されない。なぜなら、目的語の位置への移動は投射原理 (Projection Principle) に違反するからである。³⁾ そこで、現在の生成文法の枠組みの中では、Kuno に対立する大きく分けて二つの分析が存在するといっていよい。

一つは、いわゆる例外的格標示 (Exceptional Case Marking = ECM) 分析と呼ばれるものである。これには2つのタイプの分析が提案されている。

まず、第一のタイプは、補文の主語がそのままの位置で、動詞からヲ格を付与されるというものである。このタイプの分析は Ueda (1988) に代表される。Ueda によればト節は C' であって動詞からの統率を阻止し

ない。⁴⁾ 従って、補文の I P の指定部の位置で動詞から統率を受けた名詞句がヲ格を受けとる。

(4) 太郎が [_{o'} [_{IP} 花子ヲ 天才だ] と] 思っている

次に第二のタイプは、Kaneko (1988) のもので、補文の主語がヲ格を受けとるために補文 C P の指定部に移動するとするものである。この位置は動詞から統率される位置なので、ヲ格を受け取れるわけである。

(5) 太郎が [_{CP} 花子_iヲ [_{IP} t_i 天才だ] と] 思っている

Kaneko (1988)・Ueda (1988) の 2 つのタイプの分析は、ト節の中の要素が外から統率を受けて格を付与される点に共通性があるので、これらを「外からの例外的格標示 (E C M)」分析と呼んでおく。

Kuno に対立するもう一つの分析は、コントロール分析と呼ばれるもので、次のような構造を仮定するものである。

(6) 太郎が 花子_iを [_{PRO_i} 天才だ] と 思っている。

この分析による本格的な論文があるわけではないが、常に潜在的な別の選択肢として批判の対象となってきた。⁵⁾

また、日本語学の語彙論的統語論の立場からは益岡 (1987) が、認識動詞が「対象語」(本稿のヲ格名詞句)と「属性叙述補足語」(「引用語」と「連用語」)を取ることを辞書に記述しておくべきだとしている。変形を用いない枠組みによる分析は全て、ほぼこれと同じ立場とみなせよう。これはヲ格名詞句が動詞の目的語として基底生成される点ではコントロール分析と共通する。そして、これらの立場は必然的に (3 a) のような文と (3 b) のような文の間の関連性を放棄してしまうことになる。

さて、ここで本稿の位置付けをしておく。本稿では、「外からの E C M」

分析を批判し、補文内の名詞句がト節の外に移動するという分析を行う。但し、移動先は目的語の位置（即ちVの補部）ではなく、VPの指定部であると主張することになり、この点で Kuno (1976) の分析と異なる。

2. 「外からの例外的格標示」分析に対する反証

ここでは、「外からの例外的格標示 (ECM)」分析に対する批判を行う。

2.1. 「そう」による代用

一般にト節が「そう」によって代用されることは知られている (Takubo 1985, 益岡 1987)。

- (7) a. 太郎が [花子がケーキを半分食べた と] 思っている
b. 次郎も [そう] 思っている

益岡 (1987) では、このことが認識動詞構文にも当てはまることを示している。

- (8) a. 太郎が 花子を [天才だ と] 思っている
b. 次郎も 花子を [そう] 思っている

ここで、「そう」がト節内の述語句部分だけを表しているのではないことは、次の例により示される。

- (9) a. 太郎が 花子が [天才だ]と 思っている
b. *次郎も 花子が [そう] 思っている
c. *次郎も 花子が [そう]と 思っている

また、「そう」がIPだけを表しているのではないことは、次の例により明らかである。⁶⁾

- (10) a. 太郎が [_{IP} 花子が 天才だ]と 思っている

- b. *次郎も [そう]と 思っている
- (11) a. 太郎が 花子を [IP t 天才だ]と 思っている
- b. *次郎も 花子を [そう]と 思っている

従って、(8 b) でも「そう」はト節全体を代用しているものであり、ヲ格名詞句はト節の外に在ることがいえる。

2.2. シカーナイ構造

ここでは、「シカーナイ」構造の特性を利用して、ヲ格名詞句がト節の外に在るというさらなる議論を提示する。

まず、Muraki (1978) によると、「シカ」と「ナイ」は同節要素であることを要求する。例えば；

- (12) a. [ラッコが 貝を 割る] ことが 面白い
- b. [ラッコが 貝を 割る] ことシカ 面白くナイ
- c. *[ラッコが 貝シカ 割る] ことが 面白くナイ

(12 c) が非文法的なのは、「シカ」が補文内にあり「ナイ」が主文内にあるので、同節要素の条件を満たしていないからだとされる。これには反論もあるが、⁷⁾ とりあえずこの同節要素という条件を仮定して、認識動詞構文と「シカーナイ」構造の交点を探してみよう。まず、次の例を見られたい。

- (13) a. 太郎が [花子が 可愛い]と 思っている
- b. 太郎が [花子が 横顔シカ 可愛くナイ]と 思っている
- c. *太郎が [花子が 横顔シカ 可愛い]と 思っていナイ

上の (13 c) は、同節要素の条件に合致しないので非文法的なのだと考えられる。これに対して、「花子」がヲ格を取っている次の例を見ると、

- (14) a. 太郎が 花子_iを [t_i 横顔が 可愛い] と
思っている
- b. 太郎が 花子_iを [t_i 横顔シカ 可愛くナイ] と
思っている
- c. 太郎が 花子_iを 横顔シカ [t_i 可愛い] と
思っていナイ

(14c) では同節要素の条件が守られているので、容認可能な文となっている。⁸⁾「横顔シカ」が主文の要素であるならば、「花子を」も主文の要素であると結論することができる。「横顔シカ」がト節の外に位置することは、「そう」による代用によっても容易に確認できる。

- (15) 太郎が 花子_iを 横顔シカ [そう] 思っていナイ

従って、「シカーナイ」構造と認識動詞構文が交差する点にある現象(即ち(14c)が容認可能であるという事実)によって、「外からのECM」分析に対する反証がここでも成立したといえる。

3. 認識動詞構文の構造

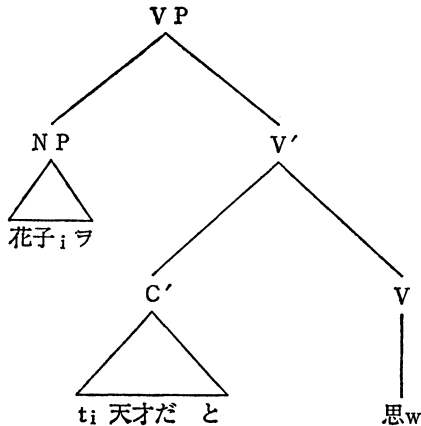
3.1. 移動と格付与

前節では、外からのECM分析が正しくないということを見た。ここで、補文内の名詞句が移動してト節の外でヲ格を受け取るという方向の分析をする。

前述したとおり、Kuno (1976) の分析は現在の枠組みでは許されない。そこで、移動先はVPの指定部だという分析を提案する。この位置は非 θ 位置であるから、そこへの移動は投射原理の違反を引き起こさない。また、動詞から統率される位置であるので、そこに移動した名詞句は動詞からヲ

格を受け取ることができる。この分析を簡単に図示すれば次の(16)のようになる。⁹⁾

(16)



3.2. V' という構成素

上の分析では、ト節([t_i 天才だ と])と動詞(思う)が V' という構成素を成している。これは、ヲ格名詞句とト節と動詞の関係における、各構成素間の相対的な結びつきの強さに対する直感……即ち、ト節と動詞の間の結びつきが強いという直感……を反映したものである。

この直感を統語的な現象から確かめるには、Takubo (1985, (pp. 99-100)) の用いたテストに言及しておかなければならない。Takubo (1985) では、疑問文・否定文のスコープの問題を扱う上で、ト節が動詞と構成素を成すことを次のような例を用いて示している(例は Takubo (1985) より)。

- (17) a. 私も それを することは した
 b. *私も それを することは それを した
 c. 私も そう思うことは そう思います

(17a)のように、「V ことは V」という譲歩的意味を持つ表現において普通は動詞だけを単独で繰り返す。(17b)のように動詞に別の要素(「それを」)をつけて繰り返すと非文法的になる。ところが(17c)のようにト節の代用形である「そう」をつけて繰り返した場合、文法的な文になる。これは即ち動詞とト節の結び付きが強いということを示す現象に他ならない。Takuboはこのテストを以て V^n のテストとしている。¹⁰⁾

さてそれでは、我々の認識動詞構文にもこのテストを当てはめてみよう。

(18) 私も 自分の息子を そう思うことは そう思います

(19) a. 私も それを そう思うことは そう思います

b. *私も それを そう思うことは それを そう思います

上の例から明らかなように、ト節と動詞が V' という構成素を成すことは認識動詞構文にも当てはまる。これは我々の分析が直感的にも正しいということを示唆的な現象によって証明するものである。

3.3. 語順の制約

ここでは、認識動詞構文に見られる語順の制約が、一般的な条件から導かれることを見る。ヲ格名詞句がト節よりも後ろに現れ得ないことはすでに指摘されている(Kuno 1976等)。例えば、次の(20b)は非文法的である。

(20) a. 太郎が ひかるを 馬鹿だ と 考えている

b. *太郎が 馬鹿だ と ひかるを 考えている

我々の分析によれば、(20a)は(21a)、(20b)は(21b)のようなS構造表示を持つ。

(21) a. 太郎が ひかる_iを[[_{t_i} 馬鹿だ]と] 考えている

b. 太郎が [[t_i 馬鹿だ]と]_j ひかる_iを t_j 考えている

(21b) は (21a) から、「かきまぜ」¹¹⁾ により派生されたものであるが、(21b) の二重下線を付した痕跡 (t_i) は次の一般的な条件に違反する。

(22) 適正束縛条件 (Proper Binding Condition……Fiengo (1977)): 痕跡は束縛されなければならない。¹²⁾

従って、語順の制約は適正束縛条件から自動的に導かれることになる。

4. 「ノコト」名詞句を伴う構文の構造

ここでは、認識動詞構文のヲ格名詞句に対応する名詞句が「ノコト」をとる場合（以下、「ノコト」構文）について述べる。まず 4.1. で、「ノコト」構文の持つ特異性について考察し、この構文がコントロール構造であると考えべきことを論じる。次に 4.2. では、格助詞脱落に関する現象を指摘し、それが格理論の観点からどう解釈されるべきかについて論ずる。

4.1. 「ノコト」の特異性とコントロール分析

ここでは、すでに従来から指摘されている現象も含め、「ノコト」にまつわる多くの特異性を挙げ、それが構造的にどう解釈されるべきかについて考察を加える。

ここで我々が扱うのは、次のような構文である。

- (23) a. 太郎が 花子ノコトを 天才だ と 思っている
b. 小沢が 海部ノコトを 弱虫だ と 思っている

上の例の「花子ノコト」「海部ノコト」のような名詞句を「ノコト名詞句」と呼んでおく。まず、ノコト名詞句がガ格で現れるような対応する文がないということが、従来から指摘されている (Kuno 1976等)。

- (24) a. * 太郎が 花子ノコトが 天才だ と 思っている
 b. * 小沢が 海部ノコトが 弱虫だ と 思っている

次に、「ノコト」構文では語順の制約がない。これはコントロール構造が示す振る舞いと同一である。例えば、(25)の(a)文は認識動詞構文、(b)文は「ノコト」構文、(c)文と(d)文はコントロール構造を持つ構文である。この中で、(a)文だけが非文法的である。¹³⁾

- (25) a. * 太郎が [ϕ_i 天才だ と] 花子_iを 思っている
 b. 太郎が [ϕ_i 天才だ と] 花子_iノコトを 思っている
 c. 太郎が [ϕ_i 踊りを踊ることを] 花子_iに 期待している
 d. 太郎が ϕ_i 踊りを踊るように 花子_iを 説得した。

また、「ノコト」構造においては、空範疇の代わりに明示的代名詞がマージナルに現れ得るが、これもコントロール構造の特徴と一致する。(26)の(a)文は認識動詞構文、(b)文は「ノコト」構文、(c)文と(d)文はコントロール構造を持つ構文であるが、(a)文だけが非文法的である。

- (26) a. * 太郎が 花子_iを 彼女_iがクラスで一番賢い と 思っている
 b. 太郎が 花子_iノコトを 彼女_iがクラスで一番賢い と 思っている
 c. 太郎が 花子_iに 彼女_iが踊りを踊ることを 期待している
 d. 太郎が 花子_iを 彼女_iが踊りを踊るように 説得した

さらに、(27a) を許さないのに、(27b) を許す話者が存在する。即ち、話者によって動詞「言う」は「ノコト」構文だけを許容する。

- (27) a. (??) 太郎が 花子を 天才だ と 言った。
 b. 太郎が 花子ノコトを 天才だと 言った

また、ノコト名詞句の場合だけ直接話法的なト節が許されるという現象もある。

- (28) a. *太郎が 花子を [あいつは天才だ] と 思った
 b. 太郎が 花子ノコトを [あいつは天才だ] と 思った

上の数々の現象が示しているのは、「ノコト」を取る構文は動詞が別の項構造を取っているということである。即ち、ノコト構文はコントロール構造だという解釈が成り立つ。ノコト名詞句には独立の主題役割が与えられているのである。¹⁴⁾ この主題役割を仮に「トピック」と呼んでおこう。従って、この場合の動詞の項構造は次のように表される。¹⁵⁾

- (29) <思考者, トピック, 命題>

4.2. 格助詞の脱落現象

上の4.1.では、ノコト構文がコントロール構造と見なされるべきだということを論じた。これは移動によって派生される認識動詞構文とは構造的に異なっているということである。即ち、「ノコト」構文においては、ヲ格を持つ「ノコト」名詞句は主文の動詞から主題役割を付与されており、他方、「ノコト」を取らない認識動詞構文のヲ格名詞句は主文の動詞の項ではなく、補文の述語から主題役割を付与されている。

さてここで、この2つの構造の違いを反映しているとみられる現象が、

格助詞脱落についても観察されることを指摘したい。次の(30)～(32)では、(a)文が「ノコト」構文、(b)文が認識動詞構文である。

- (30) a. 俺 おまえノコト ϕ そう思ってるよ
 b. *俺 おまえ ϕ そう思ってるよ
- (31) a. あいつ ホントに 僕ノコト ϕ そう思ってるのかな
 b. *あいつ ホントに 僕 ϕ そう思ってるのかな
- (32) a. おまえ 一体 誰ノコト ϕ そう思ってるの
 b. ?*おまえ 一体 誰 ϕ そう思ってるの

上の例はそれぞれ機能的に異なっている(述べ立て・疑い・質問)が、どのペアにおいても歴然たる容認度の差が存在する。同じヲ格の省略であっても、認識動詞構文のヲ格の方が省略可能性は著しく低い。この現象は、ノコト名詞句が「トピック」という θ 役割と結び付いた固有格を持つと考ええることで説明がつくであろう。¹⁶⁾

5. 結論

本稿では、GB理論の枠組みを用いて、認識動詞構文の新しい分析を提示した。本稿の重要なポイントを3つに絞れば次のようになるだろう。

1. 認識動詞構文のヲ格名詞句はVPの指定部に移動している。
2. 日本語にも例外的格標示は存在する。
3. 「ノコト」名詞句を取る構文はコントロール構造である。

本稿の議論を通じて、格・文法関係・主題役割といった概念が、密接な関係を持ちながらも各々独立した役割を果たしているということが確認されたといえる。即ち、認識動詞構文のヲ格名詞句は、動詞からヲ格を付与されながらその動詞の項ではなく、文法関係としてはVPの主語とでもい

うべき位置を占めている。

また、上の分析は、格理論・ θ 理論・束縛理論といった各モジュールの相互作用によって現象を説明したのであるが、このようなアプローチを取らないいかなる分析も、一般性の少ないアド・ホックな道具だてを用いざるを得ないであろう。

本稿の示した分析から、日本語および普遍文法（UG）の格理論を今後さらに発展させていくことが望まれる。

注

- 1) 本稿は、1991年1月に大阪大学大学院文学研究科に提出した修士論文「認識動詞構文のシンタクス」の一部を加筆・修正したものである。貴重なご助言を賜った安達太郎、金水敏、坂原茂、田窪行則、立石浩一、西垣内泰介、仁田義雄、藤田耕司、益岡隆志、三藤博の諸氏、大阪大学日本学科の諸先生方、OCTL、土曜ことばの会、語学有志会の諸メンバーに感謝したい。もちろん、活かしきれなかった点及び誤りは全て筆者の責任に帰する。
- 2) Chomsky (1981, 1986 a, b), Lasnik and Uriagereka (1988) 等参照のこと。また、本稿では Takezawa (1987) の次のような格理論の枠組みを仮定する。
 - i. ガ格は、屈折要素が統率の下に付与する。
 - ii. ヲ格は、他動詞が統率の下に付与する。
- 3) 簡単にいえば、表示のどのレベル（D構造、S構造、LF）においても語彙の情報が維持されなければならないということである。
- 4) Uedaは補文標識「ト」が無特徴（featureless）であるので、C' は最小条件（minimality）による障壁にはならないとしている。
- 5) Kuno (1976) に詳しい批判がある。
- 6) 「そう」がIPを代用する場合も無くはない。例えば、次のような文の場合がそうであると考えられる。

- i. 次郎も [そう] としか 思わなかった

また、「そう」が述語句を代用するようにみえる次のような例も存在する。

ii. それが〔そう〕とは 思わない

しかし、上の例はいずれもここでの議論に影響しないと考えられる。

- 7) 例えば, Kato (1985)。
- 8) (14c) を不自然だとするインフォーマントも存在するが, (13c) と比較して相対的な容認度が上であればここでの議論に影響はない。
- 9) この構文の直接受動の場合は, 補文内の名詞句が主文の I P の指定部に移動すると考えておく。この分析には幾つかの問題があるが, ここでは詳細は省く。
- 10) ある要素がこのテストに合格すれば動詞と構成素を成しているといえるが, その逆が成り立つとは必ずしもいえない。即ち, このテストに合格することは, 動詞と構成素を成すための十分条件ではあるが必要条件ではないと考える。
- 11) Saito (1985) に従い, I P または V P への付加と考えておく。
- 12) 語順の制約をこの条件から導くことは, すでに酒井 (1989) が提案している。
- 13) ここでは, ϕ は空範疇一般を表す。
- 14) 「ノコト」名詞句が独立の主題役割を担うというこの結論は, メンタル・スペース論を応用した田窪 (1989) の意味論的研究とも符合する。
- 15) 「トビク」という主題役割は, 正確には V' から合成的に与えられると考えられる。また, 「トビク」はオプショナルに付与され, 「ノコト」はそれが付与されたことを明確にする手段であるとの考え方もできるといってご指摘を, 田窪行則氏から頂いた (1991年3月, 於 KATL)。これについてはなおよく考えたい。
- 16) 固有格によって説明するというアイディアは, 藤田耕司氏の御示唆による (1991年3月, 於 KATL)。

引用文献

- 酒井 弘 1989「複合名詞句制約と格の交替」日本英語学会第7回（於神戸大学）口頭発表
- 田窪行則 1989「文の階層構造を利用した文脈情報処理の研究」『言語情報処理の高度化の諸問題』文部省科学研究費補助金特定研究
- 仁田義雄 1980『語彙論的統語論』明治書院
- 益岡隆志 1987『命題の文法』くろしお出版

- Chomsky, N. 1981. *Lectures on Government and Binding. Foris.*
- Chomsky, N. 1986a. *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use.* Praeger.
- Chomsky, N. 1986b. *Barriers.* MIT Press.
- Fiengo, R. 1977. "On Trace Theory" *Linguistic Inquiry* 8-1. pp.35-61.
- Hinds, J. and I. Howard (eds). 1978. *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, Kaitakusha.
- Kaneko, Y. 1988. "On Exceptional Case Marking in Japanese and English." *English Linguistics* 5, pp.271-289.
- Kato, Y. 1985. *Negative Sentences in Japanese.* *Sophia Linguistica* 19.
- Kuno, S. 1976 "Subject Raising." in Shibatani (ed). pp.17-49.
- Miyagawa, S. 1989. *Structure and Case Marking in Japanese: Syntax and Semantics* 22. Academic Press.
- Muraki, M. 1978. "The sika nai construction and predicate restructuring" in J. Hinds and I. Howard (eds). pp.155-177.
- Saito, M. 1985. *Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications.* Doctoral dissertation, MIT.
- Shibatani, M. (ed). 1976. *Japanese Generative Grammar: Syntax and Semantics* 5. Academic Press.
- Takezawa, K. 1987. *A Configurational Approach to Case-Marking in Japanese.* Doctoral dissertation, Univ. of Washington.
- Takubo, Y. 1985. "On the scope of negation and question in Japanese" *Papers in Japanese Linguistics* 10, 87-115.
- Ueda, M. 1988. "Exceptional case-marking in Japanese" *Sophia Linguistica* 23/24. pp.39-46.